

人間にとって人間ほど謎に満ち興味つきぬ存在はない。一体人はどうして生れ、男と女がおり、子供を生み、働きそして死ぬのであろう？ 人が歩いているのをみると、よくうまく歩けるものだなとつくづく感心してしまうことがある。よく出来てるな、と思う。そんな風に思うのも当人が知命という年令に達したせいかな、と思ったりする。

人間にとって人間は永遠のテーマである。画く作家にとってこれほど魅惑に満ちた対象はあるまい。それは観る方の側にとっても同じである。今世紀に入り写真が普及すると、写真がわりの肖像画は衰退した。そして一方では人間の価値観は分裂し、多様化するという現実がある。したがって現代の人物肖像画についてもその表現は多様化し、多面的なものとなってきたのは言うをまたない。ここに展示されている作品がそのことを如実に示している。

M.エルンスト・Y.タンギー版画展,デュシャン展,エルンスト「博物誌」展に続き、今回は現代人物肖像画展である。タイトルがヤケに立派な割には内容の方がささやかなので面映い感じであるが、これを第一回とし、毎年同じテーマで続けて行く積りである。回を重ねるごとに内容が充実していくよう努力したい。ご支援のほどよろしくお願いいたします。

1978年12月

佐谷和彦